

## 立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

## 大学院学生研究

## 2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 観光学 研究科 観光学 専攻	
研究代表者 (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号 <input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年 (学生番号: 18UA002B )	氏名 篠原 久仁子 印
	所属部局・職 立教大学観光学部・准教授	氏名 門田 岳久 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別 <input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	伝統野菜と科学技術の種をめぐる民俗学的研究 蓼科高原における農家の暮らしに着目して	
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2020年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名
	観光学研究科観光学専攻 博士課程前期課程2年	篠原 久仁子
研究期間	2019 年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 188,709円 / (採択金額) 200,000円	

## 研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、蓼科で野菜を育てる農家の暮らしを事例とした民俗学的フィールドワークに基づき、農家がどのように伝統野菜とF<sub>1</sub>種の野菜(経済作物)とを作り続けてきたのか、その複雑な様相を明らかにすることを目的としたものである。

先行研究では、伝統野菜のタネ/シュとF<sub>1</sub>種の二項対立が暗黙の前提とされてきた。対して本研究では、在来知と科学技術に関する人類学の分析視点をふまえることで、農家の暮らしから、野菜のタネ/シュをめぐる伝統と科学技術のハイブリッドな様相を明らかにした。さらに、観光地や伝統野菜制度、農業技術などの様々な要素が絡み合っており、現在の伝統野菜が構成されていることを指摘した。

## キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 種 (タネ/シュ) } { 在来知 } { 伝統野菜 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 研究の背景と目的**

1990年代以降、食や農業と観光を関連付けた研究が蓄積され、とりわけ食に力点をおいた観光現象は「フードツーリズム」と呼ばれている。その流れを受け、地域「固有」の食文化を象徴する食材として「伝統野菜」が再解釈されている。

伝統野菜と一般的な野菜の違いは、「種(タネ/シュ)」にある。タネ/シュに関する研究は従来、自然科学系の学問領域で対象とされてきた。近年、社会科学視点を加えた研究も見られるが、農家がタネ/シュとどのように共生しているのか、その様相は浮かび上がらない。そこで本研究では、民俗学の手法を用いて、農家の日常に着目した。

民俗学において、食や農業に関する研究蓄積があるのは生業研究である。対象は、民俗技術そのものから、地域戦略や農山漁村における諸問題まで広がり、科学技術を用いた農業に着目する研究も見られるが、現代農業を捉えた民俗学的研究は萌芽期と言える。

「伝統」については、ごく最近に成立したり、捏造されたものだと明らかにされており(ホブズボウムら 1992:9)、伝統野菜もまた、様々な要因によって創造され続けている。伝統野菜という概念は、その曖昧さゆえに多くの関係者が参画することが可能になっていると指摘されており(香坂・富吉 2015:251)、各地でのブランド化の過程や保全するための取り組みに関する研究がみられる。

先行研究に共通する問題点は、F<sub>1</sub>種の普及により野菜が画一化したことへの反発として、伝統野菜に目が向けられたことが暗黙の前提とされている点にある。F<sub>1</sub>種が手軽に入手できる現在、固定種を採り継ぐ地域にあっても、二項対立はあてはまらないと考える。このような問題意識から、農家はなぜ、どのように伝統野菜と F<sub>1</sub>種の野菜を作り続けてきたのか、明らかにすることを目的とする。

**2. 研究の分析視点と方法**

分析方法として、在来知と科学技術に関する近年の民俗学および人類学の視点をを用いる。人類学において、従来の医療人類学が在来知と科学知を二項対立で捉えてきたのに対し、近年、両者が接触し融合するプロセスを考察することの重要性が指摘されている(中空 2019)。本研究では、この研究視角を踏まえ、野菜を育てる農家の暮らしから、野菜のタネ/シュをめぐる伝統と科学技術のハイブリッドな様相を明らかにする。

本研究は、2018年8月から2019年10月までの期間において、長野県茅野市糸萱区で断続的に実施した、計11回(45日間)のフィールドワークに基づいている。

**3. 暮らしに混在する在来知と科学知**

事例とするのは、蓼科に隣接する糸萱区で野菜を育てる農家の暮らしである。蓼科が、高原リゾート地として観光開発された1970~1980年代、糸萱の農地は観光地へと変化し、ほとんどが自給的農家となった。同地区では、2015年に「糸萱かぼちゃ」と「河童瓜」が「信州の伝統野菜」に選定された。

聞き取りにより、農家がどのようにタネ/シュを選択し、栽培してきたのかを考察した。事例からは F<sub>1</sub>種や農業技術を柔軟に取り入れながら、伝統野菜のタネ/シュも育て続けてきた様相が明らかになった。一方で、タネを採り継いできたカボチャについては、タネを採る技術、活用法など、暮らしの中で受け継いできた記憶が優先され、F<sub>1</sub>種への違和感として表出していた。

**4. 自給的作物の「伝統野菜化」**

続いて「伝統野菜化」のプロセスを記述した。糸萱区において特徴的だったのは、蓼科という観光地に隣接し、観光客や別荘地の住民、宿泊施設などのかかわり合いが多いことである。結果、糸萱かぼちゃは、用途の分かりやすさや日持ちの良さから商品価値を見いだされ、経済作物化が進み、地域振興、観光、教育など様々なアクターとのネットワークが広がっていることが明らかになった。

## 研究成果の概要 つづき

伝統野菜として販売していく中で、シュとしての均一性が求められるようになっていた。元来、糸萱かぼちゃには色や形に個性があったため、大学に研究を依頼し、自然科学の観点からシュの統一を目指していた。また、タネ蒔き時期からタネ採りの仕方に至るまでも変化があったことを指摘した。

一方、「河童瓜」は、食べ方のわかりづらさ、旬の短さを理由に、従来通り、自家消費のみが続いている。このように、2つの伝統野菜が、外部のまなざしにより二分されていたことを指摘した。

### 5. 曖昧なタネ／シュとしての糸萱かぼちゃ

本章では、伝統野菜化に伴って生じた、タネ／シュとしての曖昧さをめぐるコンフリクトに焦点を当てた。糸萱に移住し、観光農園を営む園主が唯一、栽培している伝統野菜である糸萱かぼちゃについて、元農業指導員から「シュとしての不安定さ」を指摘されたことで栽培に迷いが生じていた事例をとりあげた。指摘した側も、シュを統一しすぎれば F<sub>1</sub>種と変わらなくなってしまうし、固定種とも言い切れない糸萱かぼちゃの現状を受け、揺れていた。このように、人が必ずしもコントロールしきれないタネ／シュの特性が浮き彫りとなった。

出荷シーズンを迎え、糸萱で糸萱かぼちゃを育て続けてきた農家のタネ／シュに対する葛藤も明らかになった。形質で商品価値の有無が判断され、排除される糸萱かぼちゃが生まれたことで、自身でタネ採りをしてきたタネへの愛着が表面化していた。農家が、好ましくない状況の糸萱かぼちゃに対し、「大学で選定されたタネだ」と判断した事例からは、重視しているのは科学知で均一化されたタネ／シュであることよりも、糸萱の土地で自らが採った在来知のタネ／シュであるかどうかであったことを指摘した。

これまでの事例からは、糸萱かぼちゃのタネ／シュの曖昧さや不安定さに着目してきたが、「うまいカボチャ」と判断する基準も重なりあっており、タネ／シュを選び採る在来知が、糸萱の農家に共有されていることも明らかとなった。このような在来知と科学技術を応用し、より統一性のある糸萱かぼちゃを創る取り組みも始まっている。

### 6. 結論

結論では 3 点を指摘した。①本研究が明らかにした、人間と在来知と科学知がハイブリッドに混在する様相は、伝統野菜のタネ／シュと F<sub>1</sub>種の二項対立、つまりは在来知と科学知の二項対立を越えるものである。暮らしに混在した在来知と科学知を使いこなす農家の在来知によって伝統野菜のタネ／シュが受け継がれていることを指摘した。さらに、経済的価値ももたらず伝統野菜制度や、観光地の存在も大きな役割を果たす。今や科学知を応用した F<sub>1</sub>種のような均一性も、混淆する。このように、在来知のタネ／シュ、科学技術のタネ／シュ、農業技術、伝統野菜制度、観光など様々な要素が絡み合っ現代を生きる伝統野菜が構成されている。

②伝統野菜化に伴い、野菜のタネ／シュや栽培技術の取捨選択が行われてきたプロセスを示すことで、タネ／シュと人間の複雑な在りようを明らかにした。このことは、科学技術も取り込んだ現代農業を扱う研究が不足している民俗学に対して新たな知見をもたらしたと言える。

③伝統野菜を地域内で消費するか、外部へ売り出していくものとするかによって、タネ／シュの扱い方が変わることが明らかになった。このことは、伝統野菜と観光との相関性を詳らかにするもので、観光業に直接携わっていない農家の暮らしにも観光が与える影響を示唆するものである。

#### 【参考文献】

エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー(編)(1992)、創られた伝統、前川啓二・梶原景昭他(訳)、紀伊国屋書店。香坂玲・富吉満之(2015): 伝統野菜の今—地域の取り組み、地理的表示の保護と遺伝資源、清水弘文堂書房。中空萌(2019): 知的所有権の人類学—現代インドの生物資源をめぐる科学と在来知、世界思想社。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

なし

② 図書

なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

(シンポジウム)「諏訪の高原野菜の本当の魅力とは」パネリスト、『諏訪の国 開国フェス内フォーラム』、2019年3月2日、長野県茅野市民会館

④ その他

(学会発表 ※ 申請済)

- ・ 篠原久仁子、「伝統野菜と科学技術の「種(タネ/シュ)」をめぐる民俗学的研究 - 蓼科で野菜を育てる農家の暮らしから -」、第910回日本民俗学会談話会、民俗学関係修士論文発表会、2020年5月10日(日)、: 成城大学